

超越的な原理に基づく知識形態に対するE・H・カー の批判的視座：『ドストエフスキー』と『危機の二 十年』の共通点として

河村，しのぶ
元九州大学大学院法学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/5068311>

出版情報：総合文化学論輯. 16, pp.85-109, 2022-05-01. 総合文化学研究所
バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利
は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座： 『ドストエフスキー』と『危機の二十年』の共通点として

河村　しのぶ

はじめに

本稿の目的は、1930 年代における E・H・カー（Edward Hallett Carr, 1892-1982）の著作である『ドストエフスキー』（1931）には、『危機の二十年』（1939）との間に次の共通点があることを明らかにすることにある。その共通点とは、時代や地域の違いを超越した原理に基づく知識の形態への批判である。

カーは 1930 年代に、五つの著作を上梓した。それらは処女作『ドストエフスキー』に始まり『浪漫的亡命者たち』（1933）、『カール・マルクス』（1934）、『バクーニン』（1937）、『危機の二十年』と続く五作である。

『危機の二十年』は、国際政治学の古典として、あまりに有名である。『危機の二十年』に関しては、膨大な研究が為されてきた。しかしながら、同書の出版の直前までにカーが記した、同じ 1930 年代の他の四冊の著作に関する、研究の蓄積はまだあまりない。

カーは 19 世紀の西欧文明に批判的な人々を考察した伝記四作品を、『危機の二十年』出版の実にわずか二年前まで書いていた。この事実を鑑みたとき、19 世紀的西欧自由主義批判を中心とした『危機の二十年』という国際政治学の古典誕生を大多数の既存のカー研究とは別の視座から理解する上で、カーが研究したドストエフスキー、『浪漫的亡命者たち』の主人公であるゲルツェンなどについてのカーの解釈を研究することは、非常に重要な意義を持つと考えられる。

さらに、カーは彼が死去する二年前に綴った自身の自伝である「自伝的覚書」において、彼に最も深い影響を及ぼした作家として、彼は第一にドストエフスキーを、そして第二にゲルツェンを挙げている（カー 2002、55 頁）。

カーが次のように述べていることは、カーの著した伝記作品研究の必要性和重要性を明白にするものである。

いまや私は、自分が育まれたリベラルな道徳的イデオロギーがいつも考えていたように現代世界で当然視される絶対的な存在ではなく、特権的集団の外部に住んで非常に異なった目で世界を眺めるきわめて知的な人々によって、鋭くまた説得力のある攻撃を受けていたことを初めて知った。言い換えれば、ブルジョワ資本主義社

会に対する最初の挑戦は、私に関する限り、マルクスでもボルシェビキでもなく、厳密な意味ではとても革命家とは言えない 19 世紀ロシアの知識人たちからのものであった（カー 2002、55 頁）。

すなわち、19 世紀のロシアの知識人たちを通じて、カーは自らを育んだりベラルな価値と社会が絶対的なものではないことを知ったと述べているのである。このことは、カーによる伝記作品を研究する重要な意味があることを明瞭に示唆している。

よって本稿は、カーによる伝記作品に関する研究の一環として、『危機の二十年』と『ドストエフスキー』に共通して、時代や地域の違いを超越した原理に基づく知識の形態への批判が発見できることを明らかにする。

そのために、本稿は、第一に『危機の二十年』における超越的な原理に基づく知識形態、原理原則について考察し、第二に、『ドストエフスキー』に同様の視点があることを論じていく。

次に本稿の構成を述べる。本稿は、序としての「はじめに」と、「Ⅰ. 先行研究の検討」、「Ⅱ. 『危機の二十年』のテキスト分析」、「Ⅲ. 『ドストエフスキー』のテキスト分析」、「結語」の順に構成されている。

以上、本稿の目的と意義、さらに構成を述べた。以下からは、先行研究を検討する。

I. 先行研究の検討

2000 年頃より、カーの国際政治思想の誕生を考察することを目的とする、カーの著した伝記作品に関する研究が現れてきた。この研究群には『ドストエフスキー』と『危機の二十年』の二作の関係と関連を研究したものが多く、それらには、Molloy 2003、Lauer 2005、Fiott 2010、Nishimura 2011 などの優れた研究がある。

しかし、すべての伝記作品と『危機の二十年』というカーが著した 1930 年代の全著作である五作について検討している研究は、まだ少ない。それらの代表には、西村 2012 が挙げられる。西村による 2010 年の論文も、それらのカーの五作を対象としている。しかし、紙幅の関係もあると推測され、2012 年の著作の方が、圧倒的に綿密なテキスト分析と、著者の豊富な学識に裏打ちされた極めて優れた論考となっている¹。

西村 2012 では、虚無主義の問題こそが、1930 年代初頭以来、カーが一貫して向き合ってきたものであると考えられている（西村 2012、169 頁）。カーは、第一次世界大戦後の虚無的な精神風土を克服するため、新たな秩序を模索した。そして、同書によると、カーは「ドストエフスキーの読解をその知的探求の端緒に据えた」（西村 2012、

¹ 西村 2012 の議論とその問題点は、河村 2021a において、詳しく検討されている。

171 頁)。しかし、人間の持つ非合理性という問題を、神への信仰を通じて解決しようとしたドストエフスキーにカーは満足しなかったと西村 2012 では主張されている(西村 2012、171 頁)。

西村 2012 によると、カーはドストエフスキーを研究したのちに、ロマン主義者のゲルツェンとバクーニン、そして、その対極に位置するマルクスについて考察したが、「彼らのいずれも、危機への処方箋を与えてはくれなかった」ために、「自ら答えを紡がざるをえなかった」(西村 2012、171 頁)。その結果、カーは「進歩主義と理性崇拜へ回帰」し、「十全たる基礎を有した理論を打ち立てるには至らなかった」と西村 2012 では論じられている(西村 2012、169 頁)。西村 2012 においては、カーの 1930 年代の思索は「失敗であった」と結論付けられている(西村 2012、178 頁)。その理由としては、現実主義を超えるという一貫したカーの模索の過程において、「なお安易すぎる普遍主義を求めたからこそ、彼は相対主義に飲み込まれてしまった」ことが挙げられている(西村 2012、170 頁)。同書は、さらに、このように続けている。「すでに相対主義を経験した時代において、理想主義的でありすぎた。これこそ、カーの議論が普遍的なものを導きえなかった理由である」(西村 2012、170 頁)。

西村 2012 とは対照的に、Lauer 2005 ではカーのドストエフスキーに関する思索が成功裏に『危機の二十年』さらには、『歴史とは何か』(1961)の礎になっていると論じられている(Lauer 2005)。

Lauer 2005 においては『ドストエフスキー』を通してのみ、リアリズム、進歩、国際道徳、ヘゲモニー、悲劇などに関するカーの仮説の根拠と意義を理解することができる」と主張されている(Lauer 2005, p. ii)。

そのことを論証するために、Lauer 2005 では、以下の四つの側面が、カーのドストエフスキーに「負う恩義」であると論じられている。ラウアー(Michael Lauer)によると、それらは、第一に「ロシアの精神」とカーが考えるもの、第二に非リベラルな人間の本質についての考え方、第三に自我と社会との関係の中心的な意義、そして、第四に人間や社会における二元論の重要性である(Lauer 2005, pp.11-12)。

上記の四つの側面は、確かにドストエフスキーと『危機の二十年』との関係を考察するうえで柱となる概念であろう。しかしながら、それらの四つの側面は、人間の思考の相対的かつ仮説的な側面と、超越的な原理に基づく知識形態に対する批判を考慮しなければ、解明することはできないと本稿は考える。

Lauer 2005 の研究は、以下の二つの方向でより発展させられることが可能であると考えられる。第一に、Lauer 2005 では、四作のカーの著した伝記作品のうちドストエフスキーにしか言及されていない。よって、ラウアー自身も論じているように、他の伝記作品である『ロマン的亡命者たち』などを研究する必要がある(Lauer 2005, p.121)。

第二に、ラウアーが挙げた四つのドストエフスキーからカーが「負う恩義」の根底にある、超越的な原理に基づく知識形態への批判の研究が必要とされているといえよう。

よって、本稿においては、以下からカーによる超越的な原理原則や知識形態への批判について分析を行っていく。

以上、先行研究の検討を行った。

第二節より、カーの著作のテキスト分析を行う。次節では、まず『危機の二十年』のテキスト分析を行う。

II. 『危機の二十年』のテキスト分析

1. 抽象的原理における超越的な原理や知識形態に対する批判

『危機の二十年』の目的は、戦間期における19世紀的自由主義の実態を明らかにすることである（山中 2017）。その思索を行う際、根底にある視座の一つが、超越的な原理や知識形態に対する批判的姿勢であると考えられる。なぜなら、カーはこの著作の中で繰り返し「絶対的、普遍的原理と信じられているものが、およそ原理という代物でない」（111）²ことを主張し、時間や場所を超越する原理に対して強い批判を行っているためである。カーは、次のように述べている。

こうした抽象的原理を具体的な政治情勢に適用する試みが行われるとすぐに、これらの原理は、利己的な既得権益の見え透いた仮装であることが露になる。（111）。

このように、カーは抽象的原理における超越的な知識形態に対して否定的な視座を示した。

この点に関して、本節は、第一に、19世紀的合理主義の議論に対するカーの解釈を検討する。第二に、カーの国際連盟に対する評価を検討する。

(1) 19世紀的合理主義

18世紀、貿易が極めて重要になった西ヨーロッパでは、貿易の活発化に伴い、政府の権限によって作られた重商主義理論と、それによって打ち出された数々の規制に対して、反発が生まれた。それらの規制に代わるものとして、普遍的自由貿易という理想像が生まれたと

² 本節において、これ以降、著者名や出版年がなく、括弧内に数字のみを記している箇所は（Carr 1939）のページ数を意味する。

カーは述べている (10)。カーによると、この理想像から、イギリスでは、アダム・スミス (Adam Smith) などによって、政治経済学が打ち立てられた (10)。

カーは、この新しい学問を「実際に存在する事実を否定することから生まれた」と論じている。(10)。

19 世紀には、産業革命がおこり、イギリスの哲学者、ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham) は、ある合理的倫理を導き出した。それは、かの有名な「最大多数の最大幸福」という定式である。これは、カーによると「人間性の根源的特徴とは快楽を求め、苦痛を避けることだ」というベンサムの仮定から得られたものである (32)。ベンサムは「最大多数の最大幸福という定式を絶対視し、人間の数だけ正悪の基準があるという見解を無政府主義だとして拒絶した」ことをカーは批判している (32)。

しかしながら、カーによると、ベンサムの貢献は、二つの点において重要であったという。第一に、ベンサムは、善と幸福を同一視した。このことにより、彼は 18 世紀合理主義の「科学的仮説」である人間は「自然法に絶対的に従うだろうという仮説をもっともらしく承認した」のであった (33)。

第二のベンサムの貢献は、「この学説の合理主義的・個人主義的側面を保持しつつ、その支持基盤を首尾よく広げることができた」ことにあったとカーは考えている (33)。

カーによると 18 世紀までは、理性に関する説は極めて貴族的であった。なぜなら、それは哲学者だけが、善を発見するのに必要な理性を持つとされていたためであるとカーは論じている。よって、理性説から導き出された政治理論は、「哲学者たちの啓蒙専制主義」というものであったとカーは述べている (33)。

しかし、19 世紀には、ベンサムの定式により、幸福が基準となった。すると、個人に求められたのは、自分の幸福がどこにあるのかを理解することのみとなった。よって、この合理的問題は善であるため、深遠な哲学の問題は、単純な常識の問題となったとカーは説明している。カーは、ベンサムを「救済の学説を構築した最初の思想家であった」とする (33)。

さらに、カーは、19 世紀にあった楽観主義の特徴を以下の三点に集約している。19 世紀の楽観主義は、第一に、「善の追及は正しい理性の働きの問題であること」という点をカーはその特徴として挙げている。第二に、カーによると「知識の普及によって、すべての人々は、やがては、この重要な課題について正しく理性を働かせることができるということ」である。第三に「この課題について正しく理性を働かすものは、誰でも必ずや正しく行動する」という点をカーは挙げている (34)。

しかし、カーはこの学説を極めて 19 世紀的なものであると考えていることが、以下の議論から明確になっている。

カーは、1900 年以降にはイギリスにおいても、他のヨーロッパ諸国においても、ほとんどの政治思想家が、ベンサム主義的仮説を無条件には支持しなくなっていたと主張している (36)。

しかし、「半ば見捨てられたこの 19 世紀の仮説は、20 世紀の 20 年代および 30 年代に国際政治という特異な分野に再びその姿を見せ、新しいユートピア的殿堂の礎石になった」ことを明らかにしたカーは、これを「歴史の皮肉」と呼んでいる (36)。

この「歴史の皮肉」の要因として、カーは以下の二つを挙げている。

第一に、1914 年の第一次世界大戦勃発を機に、人々が「19 世紀の平和と安全の強固な基盤に向かっていつしか手探りで戻っていった」ことをカーは挙げている (36)。

第二に、そして、より決定的な要因として、アメリカの影響を挙げている (36-37)。アメリカの影響を重要視する理由として、カーは以下の二点を示している (36-37)。

第一に、1920 年から 1930 年代当時、アメリカはまだ、ヴィクトリア潮流の繁栄の絶頂期にあった (37)。そして、第二に、第一の事項と関連して、ベンサム主義に対するヴィクトリアン的革新の全盛期に、アメリカは依然としてあったことを、カーは指摘している (37)。

19 世紀のイギリスの政治家であったジョン・ブライト(John Bright)やウィリアム・グラッドストーン(William E. Gladstone)の「熱烈な崇拜者」であるアメリカ大統領ウッドロー・ウィルソン(Woodrow Wilson)が、19 世紀的合理主義を国際政治に取り入れたということを、カーは次のように述べている。

ウッドロー・ウィルソンが 19 世紀の合理主義的信条を、処女地ともいうべき国際政治の分野に移植した。19 世紀の合理主義的信条をヨーロッパにもう一度持ち帰り、それに新しい生命を吹き込んだのである。よく知られている戦間期国際政治理論のほとんどすべてのものは、19 世紀の自由主義思想を反映したものである。そして、それらはアメリカという鏡に映っていたのであった (37)。

このように、19 世紀的自由主義の理論が、時代や国家の発展段階にかかわらず「移植」された結果は、悲劇的に不毛であり、幻滅を招いたとカーは論じている (37)。なぜなら彼によると「自由民主主義の理論が移植された時代・国家の発展段階や現実の要請は、19 世紀西ヨーロッパにおける発展段階や現実の要請とは全く違っていたから」である (37)。

以上のように、カーは自由民主主義が、普遍的にどの時代のどの国家にも適合するのではないことを主張する。自由主義も、自由民主主義も特定の国家に特定の発展段階においてのみ、適合することを説いている。これにより、抽象的原理というものにおける超越的な原理に基づく知識形態を否定している。

このような議論は、国際連盟についても繰り広げられている。以下からは、カーの国際連盟に対する考えを分析していく。

(2) 国際連盟

カーは、国際連盟に関する議論についての節を、このような文章を以って始めている。

国際政治におけるこの偏頗な主知主義に影響されたすべての機構のうち、最も重要なものは国際連盟である (38)。

つづけて、その理由を以下のように述べている。

民主主義的合理主義を国内領域から国際領域へと移植したことは、予期していなかった多くの困難をもたらした。経験主義者は、具体的な事態を、その個々の利害得失に基づいて扱う。合理主義者は、この具体的な事態を抽象的な一般原理の問題として扱う。どのような社会秩序も大いなる標準化を意味しているため、多くの抽象化を含んでいる。つまり、共同体のメンバーがそれぞれ異なった物差しを持つことはあり得ない (38)。

すなわち、ある共通基準に忠実に従う名もなき個々人から構成される共同体では、このような標準化は、困難ではないが、このような標準化は、諸国家に適用されると、混乱を招き、大変な事態を引き起こすとカーは主張する (38)。なぜなら、国家間においては、「領土の規模、国力、さらには、政治・経済・文化的発展段階などにおいて大きく異なる」ためであるとカーは説明をしている (38)。

カーは国際連盟の創設者たちの中には、政治的経験を持ち、政治に精通していた人がいたことを強調している。さらに、国際連盟の理論的欠点が、逆説的に長所になっていることも、カーは、論じている (38)。

その例として、カーは、連盟規約を挙げている。連盟規約はすべての加盟国を平等に扱おうとはした。しかし、大国に対しては連盟理事会での恒久的優位性を保証したことをカーは肯定的に評価している (39)。

また、連盟規約は戦争をすべて禁じたわけではなかったことも、カーは指摘している (39)。規定違反国を制裁するという連盟加盟国の責任は、「曖昧さを残していた」ことにカーは着目し、これも肯定的に評価している (39)。

しかし、これらを踏まえたうえで、カーは国際連盟の意義を否定的に結論付けている。

国際政治の荒狂う洪水を、19世紀の自由主義理論から生まれた一連の抽象的公式に、導き入れて解決できるということが、連盟関係者の間で信じられるようになった、まさにその時に、実効的な政治的機関としての国際連盟の終末が見えてきていたのであった (41-42)。

このように、カーは国際連盟が終末を迎えた原因として、「抽象的公式」を挙げている。国際連盟の生成期に、ヨーロッパの最も有力な政治家たちが、国際連盟を軽視し、また連盟において、抽象的合理主義が優位に立ったことから、ジュネーヴの連盟本部には、リアリティを乖離した気流が、強く流れたとカーは論じる (40)。具体的な一例として、カーは連盟の「ブリアン・ケロッグ協定」を連盟規約に組み入れようとする計画、そし

て、「侵略者の定義」を挙げ、これらが「すべて合理化という危険な道への里程標となった」と述べている（40）。カーは、このように記している。

この時期に、ジュネーヴで用意されたユートピアン風料理が関係主要国に好まれなかったという事実は、理論と現実との距離が、さらに広がることの表れであった。

（中略）言葉によって、事実をゆがめてしまうことによって、抽象的理性の世界と政治的リアリティの世界との間が、度々区別のつかないものになってしまうのである（41）。

このような「抽象的公式」に対する、同様の認識が、連盟代表者や、連盟支持者以外の政治家にも共有されていたことを示すために、カーはチャーチル首相の1932年の言葉を引用している。

私は、政治家の言っている言葉と、多数の国家で実際に起こっている事態との間に今日ほどずれのある時代を、全く思い起こすことができない（41）。

カーは、「ジュネーヴの形而上学者たちにとっては、彼らが戦争禁止のための巧妙な言い回しをいくら重ねても、戦争それ自体を阻むことなどできないのだとは、にわかに信じ難いのである」と指摘している（41）。

以上のように、カーは、抽象的一般化に対して、非常に否定的な視座を持っている。その理由は、抽象的一般化とは、「共同体のメンバーがそれぞれ異なった物差しを持つことはあり得ない」という考え方に基づいているためである。これは、まさしく、一元的かつ超越的な原理や知識形態に対する強烈な批判である。ここまで、合理主義と国際連盟についてのカーの解釈を分析することによって、彼の超越的な原理に基づく知識形態に対する否定的な姿勢を浮き彫りにしてきた。

以下では、カーが一元的で、超越的な原理や知識形態に基づく道徳について、否定的であることを考察する。

2. 道義の解釈における超越的な原理や知識形態に対する批判

『危機の二十年』において、カーの道義についての議論は、超越的な原理に基づく、普遍的な善悪に対する懐疑的な姿勢を全面的に押し出している。

カーの普遍的善悪に対する批判的考察は、『危機の二十年』第二部の「国際的危機」における利益調節に対する批判的な検討において、最も顕著である。したがって、以下では、『危機の二十年』第二部第五章の議論を分析していく。

国益と普遍的利益についての議論の中で、カーは次のように述べている。

社会道義の理論は、常に支配集団が生み出すものである。つまり、支配集団は自らを全体としての共同体と同一視する。しかも支配集団は、下位集団や個人には与えられていない、その共同体に自らの人生観を押し付けるための目的達成手段というものを持つ。同じ理由から、そして同じプロセスを経て、国際道義の理論も、支配的な国家ないし国家集団がこれをつくる。(中略)したがって今日の国際道義の理論は、彼らの優位を永続させるように練り上げられているのである。(101)。

すなわち、この議論から、カーは「利益調和説は、言うまでもなく、富裕特権階級が支持する仮説である」ことを明らかにしている(102)。

その理由として、カーは次の二点を挙げている。第一に、富裕特権階級に属する人々は、共同体において強い発言力を持つのは明確であることを、カーは指摘している(102)。第二に、富裕特権階級に属する人々は、共同体の利益と自分の利益とを、同一視する傾向があることが挙げられる(102)。

カーによると、この二つの利益が同一視されると、支配集団の利益を攻撃する者はだれであれ、共同体の利益を攻撃しているのだと非難されるという(102)。また、支配集団の利益を攻撃する者は、自身のより高次元の利益を損なう行動をしていると批判されることを、カーは指摘する(102)。その結果をカーは次のように著している。

こうして利益調和説は、特権集団が、彼らの支配的地位を正当化し維持するために、彼ら自身が愚直に作り上げた巧みな道義的装置として働くのである(102)。

さらにカーは、支配階級である富裕特権階級の発言力があまりに強く圧倒的であるため、彼らの利益こそ共同体の利益であるという意識が、実際に生まれてくることを指摘する(102)。

利益の自然調和とされるものが、何らかのリアリティを持つ限り、この自然調和は、特権集団の圧倒的な力によって作りだされる。したがって、道義は権力の所産であるというマキアヴェリの行動原則を極めてよく例証するものとなる(102)。

このことを例証するために、19世紀、イギリスの製造業者や商人は、自由放任主義が自らの繁栄を支え、自由放任主義こそがイギリス全体の繁栄を支えているのだと確信していたことをカーは挙げている(103)。

それゆえ、労働者によるストライキ決行は、製造業者や商人たちという特権階級の利益を損ねるだけでなく、イギリスという共同体全体の繁栄に害をなすと考えられたことをカーは指摘する(103)。カーは、このように記している。

その結果、労働者はトインビー教授の先輩たちからは不道德な存在と非難され、ジンマーン教授の先任者たちからは、混乱した頭の持ち主だとして、それぞれもっともらしく非難される、というわけである。さらに、このような主張は完全に正しいのだ、という意識が実際に存在していたのである（103）。

しかし、カーは、利益調和と階級間連帯の理論を、「恵まれない労働者たちには、都合のよいごまかし以外の何物でもなかった」と論じる（103）。

そして、カーは同じ分析が国際政治にも適用されていることを主張している（103）。その例として、カーは19世紀における自由貿易を挙げている（103）。

カーによると、19世紀のイギリスの政治家たちは、イギリスの繁栄を促すのは、自由貿易であり、イギリスが繁栄すれば、世界全体が繁栄するのであると強く確信していた（103）。また、イギリスの優位は世界貿易において、その当時は圧倒的であったため、イギリス経済の崩壊は世界規模の恐慌と破滅を意味していた（103）。その理由として彼は、イギリスの隆盛が、他国に恩恵として流れ込んでいたことを挙げている（103）。

そして、イギリスの自由貿易主義者は概して、次のように論じていたことを、カーは示している。

保護貿易諸国は自分勝手な行為で、世界全体の繁栄を侵害しているばかりか、愚かにも彼ら自身の繁栄をも侵害しているのであり、したがって彼らの行動は不道德かつ間抜けである（103-104）。

カーはこの保護貿易批判の理論に対して、強い論調で批判を加えている。ここに、カーの、罪や不道德に対する考え方が明快に表れている。悪や不道德は、普遍的なものではなく、強者から見たそれらが、絶対的なものではないということを、カーは以下のように論じている。

イギリス人の目からみれば、国際貿易は全体として一つのものであり、栄えるのも衰えるのも一蓮托生であるというのは、反論の余地がない。しかし、それにもかかわらず、国際的利益調和というものは、恵まれない国々にはごまかしに思えた。これら恵まれない国々が、低い国際的地位にとどまることを強いられ、国際貿易にわずかしあずかることができないことは、この国際利益調和というものによって正当化されたのである（104）。

以上のように、道義についての考察において、カーの超越的な原理に基づく知識形態への批判が明白に表現されている。なぜなら道義とは、よって立つ立場によって、変わるものがあり、普遍的な善や普遍的な悪という絶対的な道義が存在するという解釈に、カーは否定的な姿勢を示しているためである。

以上、『危機の二十年』においてカーが普遍的、もしくは超越的な原理に基づく知識形態に対して鋭い批判を行っていることを明らかにした。

以下では、『危機の二十年』出版の八年前に上梓されたカー著『ドストエフスキー』にも、上述の批判が登場することを明らかにすることで、二つの著作に共通した特徴としての超越的な原理に基づく知識形態への批判に照射する。

Ⅲ. 『ドストエフスキー』のテキスト分析

1. 『ドストエフスキー』の概要

(1) 『ドストエフスキー』におけるカーの主張

『ドストエフスキー』においてカーは、世の中に、時間や地域を超越した原理に基づく知識の形態は存在しないということを主張している。カーはドストエフスキーによる著作と彼の人生の研究において、カーの親しむ西欧的自由主義に懐疑的になっていった。西欧的自由主義は、超越的な知識形態、普遍的原理を前提とするが、ロシアにおいては、それは、常識ではない。その一例をとっても、現状が変われば、全ては変わるとカーは考えるに至った。ドストエフスキーの作品と人生を鑑みて、人間の思考の相対的かつ仮説的な性質に着目することをカーは始めた。そしてカーは、時間や場所を超越した原理に基づく知識の形態へ批判を向けることとなった。

(2) 『ドストエフスキー』における着目すべき箇所

『ドストエフスキー』には、ドストエフスキーの体験を通して、カーの信じてきた超越的な前提に対して、懐疑心を抱くようになった過程が顕著に表現されている部分がある。

それらは、第一に、シベリアのオムスクでのドストエフスキーの投獄生活ののちに、彼が書いた作品に関するカーの考察である。

第二に、ドストエフスキー晩年の五大小説に対するカーの評価と解釈における描写である。

よって、本稿は第一にドストエフスキーの投獄生活とその直後の作品に対して、カーがどのように解釈しているのか検討する。

さらに第二に、ドストエフスキーの五大小説中、『罪と罰』、『白痴』、『カラマーゾフの兄弟』を一作品ずつカー自身の言説を交えながら検討していく。

以上、特に着目されるべき『ドストエフスキー』の部分について言及した。

以下からは、シベリアにおけるドストエフスキーの流刑経験について、カーの記述を分析していく。

2. シベリアでの流刑経験

第一に、シベリアのオムクスでの投獄生活をカーが如何に綴っているのかを概観する。

シベリアにおけるドストエフスキーの流刑経験は、『ドストエフスキー』において超越的な原理に基づく知識形態に対する批判を形成する第一の形式である、普遍的善悪の問題としてカーは考察している。

1849年4月、ドストエフスキーは冤罪だったにも拘わらず、思想犯として逮捕される。長時間にわたって尋問は繰り返された。そして、八か月の独房生活を強いられたのち、彼には死刑が宣告されたのだった。しかし、この極刑は、軽減される。

これは、芝居だったのである。皇帝と軍法会議は、意図して「死刑」と「減刑」を宣告したのである。青年たちに、思想犯罪には恐ろしい刑が待っているという教訓を示すためであった。

ドストエフスキーの刑は、「死刑」から、「四年間の懲役ののち、兵卒として服役すること」に変更となった。そして、零下四十度にもなる道を徒歩で手かせ足かせを付けられ、シベリアの監獄へと移動した。こうして、幽囚時代が始まる。

カーは、ドストエフスキーの四年に渡る監獄生活について、三種類に分けられる記録を、ドストエフスキーが残していると述べる (59)³。一つはシベリアから書き送った手紙、二つ目は、60年代初めペテルブルグへ帰還したのちに発表した小説である『死の家の記録』(1861)、三つ目は、さらにそののちのドストエフスキーの著述に見られる言説の三種類であるとカーは記している (59)。

第一に、ドストエフスキーがシベリアから送った手紙についてのカーの分析を検討する。

カーによるとドストエフスキーが、彼の兄、ミハイルに宛てた、ある手紙には、このような記述がある。

囚人は皆、豚のような強烈な臭いがし、「生き物である以上」豚のようにふるまうほかはないと言っています (60)。

³ 本節において、これ以降、著者名や出版年がなく、括弧内に数字のみを記している箇所は (Carr 1931) のページ数を意味する。

他方、カーはドストエフスキーが彼の兄に宛てた別の手紙において、以下のような部分を抜粋している。

四年の歳月の中で、監獄にいる泥棒たちの中にも、人間性を発見するようになりました。あなたは信じてくれるでしょうか。彼らの中に、深遠な、力強い、美しい性質が存在するのです。粗野な外観に反し、その内面に黄金を見出すということは、なんという喜びでしょう。一人や二人ではないのです。大勢いるのです。それらの人々は、尊敬しないわけにはいかない人達もいれば、ただひたすら美しい人達もいます（66）。

すなわち、ドストエフスキーとは異なり、実際に凶悪な犯罪、殺人や窃盗といった行爲を行った流刑者たちが、ドストエフスキーや一般の人とも変わりなく人間として尊いということに、彼は驚きを抱きながら、気づいていく様子をカーは記している（66）。

第二に、逮捕から十年以上の歳月を経た 1860 年代に、ドストエフスキーが著した『死の家の記録』について、カーの分析を検討する。

上述のドストエフスキーの手紙に現れる思想は、『死の家の記録』にも明瞭に表れてるとカーは指摘する（67）。以下に、カーが『死の家の記録』から抜粋し、カー著『ドストエフスキー』に記している部分を紹介する。

暗くて、敵意にみちた他の囚人たちの中にも、私は親切な楽しそうな顔を認めざるをえなかった。「悪しき人々はどこにもいる。そして悪しき人々の中にも善良な人々がいる」。自らを慰めるような気持ちで、私はあわててこのように反省をした。「わからないじゃないか。この人たちも結局は監獄の外にいる人々より、悪い人間ではないかもしれない」（67）。

このようにして、ドストエフスキーの価値観は大きく揺るがされたことをカーは指摘している。ドストエフスキーは、投獄時代を経て普遍的な善、もしくは普遍的な悪は存在しないという考えに至ったのであったとカーは解釈している（70）。カーは次のように論じている。

監獄は、ドストエフスキーがこれまで聞いていた、あらゆる標準の道徳を覆したのだった。美德と悪徳という慣習的な範疇は、もはや道徳的世界における対立する極ではないように思われた。ドストエフスキーが人間の法ばかりでなく、日常受け入れられている道徳的価値体系までもが不適切であることを認識するようになり、

通常、認められているような善悪の境界を超えた、より遠大な真実への探求について思索し始めたのは、『死の家の記録』においてであった（70）。

そして、次第にドストエフスキーは、西欧型自由主義の理性の下に統合された存在としての個人という普遍的な前提に、批判を開始した。ドストエフスキーが、英国発祥の功利主義から離れた思想を築き上げた過程を、カーは著している。

革命的民主主義者であり、今日でも広く知られている『何を為すべきか』（1863）の著者、チュエルヌイシェフスキーを、ドストエフスキーはJ・S・ミルの弟子であると表現している。カーは、ドストエフスキーの西欧の理性に対する考え方を、以下のように描写している。

この頃までに、ドストエフスキーの最も強い確信の一つとなっていたのは、人間の本性はチュエルヌイシェフスキーのような楽観的功利主義者らが信じていたように、根本的かつ本質的に善であるなどということはないということである。即ち、人間は、その本性のある一面に基づいて悪を悪と知りながら欲したり、選んだりする可能性があるということであった（120）。

ドストエフスキーは、シベリア流刑経験を経てこのように、善悪の超越的な知識形態に対して批判的な態度をとるようになった。このことから、カーはドストエフスキーの作品には、シベリア流刑の前後で質的な転換が生じたと主張する（48）。ドストエフスキーの作品の非連続性を主張するカーは、次のように述べている。

他のほとんどの作家の作品と違い、シベリア流刑前のドストエフスキーの小説を、その後の彼の作品と、切れ目ない発展の鎖の最初の輪であると、看做すことはできない（48）。

ドストエフスキーの作品における質的転換に続けて、カーはドストエフスキーの流刑後の文体がロマン主義の文体から大きく離脱したことを指摘する。それは、ドストエフスキーが、普遍的な善を前提とするロマン主義に懐疑的になり、ロマン主義自体からも離れていったことを意味すると、カーは主張する（48）。

以上のように、カーはドストエフスキーが普遍的なものに対して懐疑的になる要因としての、シベリア、オムスクでの投獄生活を描写した。ドストエフスキーの価値観が大きく揺るがされ普遍的な善、もしくは普遍的な悪は存在しないという考えに至ったことを、カーはここで明らかにしている。このドストエフスキーの経験を通じて、普遍的な善を前提とする西欧的自由主義への批判という視座を、カーは持つようになったことが

明らかである。そして、このことは、本稿の「はじめに」において言及したカーによる「自伝的覚書」によって裏付けられているともいえる。

次にカーが超越的な原理に基づく知識形態の問題として着目したのが、ドストエフスキーが晩年に著した、いわゆる五大小説である。その中でも、超越的な知識形態に関するカーの考察は、彼が普遍的善悪の問題と概念のたえまない刷新の必要性を発見した『罪と罰』、西欧的道德とロシア的道德の差異を論じる『白痴』と『カラマーゾフの兄弟』において、如実に表れている。したがって、次節からは、カーによるドストエフスキーの五大小説のうち、『罪と罰』、『白痴』と『カラマーゾフの兄弟』という順にカーの解釈を検討する。

3. ドストエフスキーの五大小説

これらの五大小説を書く時期には、ドストエフスキーは「人生と哲学の問題を劇化した」とカーは述べる（147）。

これらの小説の主題は複数あるとしながらも、カーはロシアの批評家の言葉に依拠しながら、ドストエフスキーの小説を「行動する哲学」と呼んでいる（147）。

カーは「行動する哲学」を次のように解釈する。「ロシア人はいかなる原理もいかなる慣習も、その根柢を探ってしまうまでは、これを受け入れることをしない」（148）。彼によると、このロシア的性質は、「ロシア人は生活と思想、実践と抽象を区別する方法を知らない」ことに由来しているという（148）。「倫理と形而上学の問題は、あらゆる時代の真のロシア人にとっては、人生の核心」である（148）。そして、「久しく確立された国民的伝統とか、そこから生ずる性格の鍛錬といったことがないので、ロシア人は生来、徹底的に実験的である」とカーは論じる（148）。

アングロ・サクソンの「抽象的問題を扱う際の完全な教養のしるしとも考えられるある種の無関心」や「イギリス人は、ある限界をふみこえてまで、ある問題を究明することを心なき技と考える」ことの対極にロシア的性質はあり、「ロシア人は教養的価値を認めない」とカーは解釈する（148）。そして、その点において、ドストエフスキーを最もロシア的人物とカーは考える。カーは続ける。「ある原理を主張することは、そこから生ずる実際的な結果よりも、ロシア人の精神にとってははるかに重大なのである」（148）。

カーは西欧的な神学論とドストエフスキーから学んだロシア的な神学論の違いの中に、いかに西欧的な神学論を基盤とする西欧的な常識が全くもって「常識」ではないことに衝撃を受ける。そして、彼の超越的な原理に基づく知識形態に対する批判はますます確固たるものとなってゆくのである。

(1) カーによる『罪と罰』の解釈

第一に、五大小説のうち、『罪と罰』からカーの解釈を検討する。

『罪と罰』は、原理のために殺人を犯した青年、ラスコーリニコフの物語である。彼は、金貸しの老婆を殺害し、その場に偶然居合わせ犯行を目撃した妹をも殺してしまう。殺害後、彼は奪った金品には一切手を付けず、それらを隠していた。彼の犯行を裏付ける証拠は何もなかったにもかかわらず、彼の神経は狂ってしまうのであった。そして、彼の罪が確証されないにもかかわらず、彼は罪を自白する。そして、八年間のシベリア流刑を宣告される。ラスコーリニコフは、彼の犯した殺人自体を後悔するのではなく、彼の神経が持ちこたえることができなかったことを後悔しつつ、シベリアに送られる。その際、ソーニャという女性が彼の後を追う。彼女の影響で、ラスコーリニコフは回心をはじめる。以上が『罪と罰』のあらすじである。

カーはこの小説の主題は、「殺人の動機と、殺人犯人に対する周囲の反応の分析である」としている（149）。

「この主題の中にドストエフスキーは、自我と周囲の世界との関係、個人と社会との関係という全問題、要するに、倫理と形而上学の中心問題を具体化したのである」とカーは述べる（150）。そして、「ラスコーリニコフは、オムスク監獄におけるドストエフスキーの体験に負っている」とカーは解釈している（150）。

この体験の一結果は、前述のとおり、一般に受け入れられた道徳律に対するドストエフスキーの信仰を打ちくだき、いわゆる常識的に考えられている善悪の境界線を越えて別な真実を求めるようにさせたということであった。そして、『罪と罰』においては、これまで「普遍的な善」とされてきたものを現実に照らし合わせて、本当に「善」であるのかをラスコーリニコフは問うている。旧来の普遍的な「善」という前提が崩壊しているという現実を受け入れた彼は、新しい理想である「新しい善」を模索している。換言すると、ラスコーリニコフの犯罪の神髄は、この新しい「善」の模索にあるといえる。つまり「常識への屈従」ではなく、「自己主張に基づく善」を発見しようという決意にあるとカーは解釈している（150）。

ここに、『ドストエフスキー』を通じてカーの主張するテーマが再び現れるのである。時代や地域などが違えば、原理やそれに基づく知識の形態は変化する。さらに人間の思考は相対的であり、仮説的であるという性質を持っている。よって超越的な知識形態というものは存在しない。

カーの解釈によるとラスコーリニコフは古い前提を刷新しようとしていることから、新旧の「善」に対する相対的な考察が、ここでは非常に重要な役割を果たしている。そして、「善」という概念は、この相対的な検討ののち、新たな「善」の発見を目指して

いることから、時代や必要性に応じた概念の再生の必要性をカーが暗示的に支持していることがうかがえる。

この作品は、カー著『ドストエフスキー』の第九章で詳細なる検討が施されている『地下室の手記』を発展させたものであるといえるであろう。『地下室の手記』において、崩壊した理想である崩壊したユートピアに、現実であるリアリズムに照らし合わせて、それら二項のあいだにある齟齬を発見し、発見したものをありのまま受容することの重要性をカーが主張していることは、河村 2021b において論じられた。

カーはラスコーリニコフの苦悩について、以下のように評している。

ラスコーリニコフは、いったい自分自身のために殺人を犯したのか、人類のために殺人を犯したのかさっぱり確信がない。しかし、超人なるがゆえに自分独自の道徳律を設けて、外的な道徳律には従わないという理論によって行動した。あるいは、倫理は本来全く合理的で功利的なものであるから「下劣な、いとわしい害虫」を殺すことは有徳の行為であるとの理論によって行動したにせよ、理論そのものがむなしいことは結果において明らかにされる。(中略) ラスコーリニコフの悲劇は、その行動の基準となった原理の崩壊である (152)。

カーの『罪と罰』の解釈は、以上のように、超越的な原理に基づく知識の形態への批判的態度と直結している。そして、『罪と罰』という小説は、ドストエフスキーにとって不完全な解決であったとし、続く他の小説に倫理の問題とは別の倫理的理想の世界が展開されていくことをカーは述べている。

以上、ドストエフスキーの『罪と罰』のあらすじと、同書に対するカーの解釈について論じた。次に、カーによる『白痴』の解釈を検討していく。

(2) カーによる『白痴』の解釈

ドストエフスキーの五大小説の『罪と罰』に続く長編作品、『白痴』は、ドストエフスキーの倫理的信念を明確に表現しているとカーは論じる (203)。そして、抽象的な思索家としてのドストエフスキーとは違う、一人の芸術家、ドストエフスキーは、まさしく、新たな世界の創造主であるとカーは記している (204-205)。カーは次のように綴っている。

あらゆる時代の偉大な作家の中でも、ドストエフスキーに永遠の地位を与えている特徴は、我々に新しい世界を創造し、我々の古い基準、希望、不安、理想の意味を失わせ、新しい光の中に変貌をとげさせるのである。すなわち、そのことによっ

て、我々を存在の新たな次元へと引き上げる能力が彼にはある。そして、この特徴は最高度に『白痴』のうちに示されている（204-205）。

すなわち、ドストエフスキーの能力である概念の刷新が、『白痴』という作品において、見事に完成しているとカーは解釈しているのである。

『白痴』のあらすじは、以下のようである。

主人公ムイシュキン公爵は、幼いころから癲癇を患っていた。療養のために、スイスに行っていたが、遺産相続のため、ロシアへ帰国する。

そして、二人の女性が彼に恋をする。その一人は、ある将軍の若い娘である。そして、今一人は、金持ちの商人に棄てられた妾である。憐憫の情から、ムイシュキンは後者と結婚しようとする。

しかし、ムイシュキンに犠牲を強いたくないこの女性は、結婚寸前になり、姿をかくし、別の求婚者の下へ走る。ところが、この求婚者は、公爵に対する嫉妬に狂い、この女性を殺害する。

そして、腐敗していくこの女性の死体の傍らで、公爵と殺人者は二人並んだまま一睡も眠ることもせず、夜を明かす。殺人者はシベリアへ行くことになる。将軍の娘は山師的な別の男性と結婚する。公爵は、身体的に弱り切り、そして精神にも異常をきたし、スイスへ帰る。

以上が、『白痴』のあらすじである。この陰鬱な小説を、カーは「比類ないまでに健全な、清澄な作品」として絶賛している（204）。

カーは西欧的な神学論とドストエフスキーから学んだロシア的な神学論の違いの中に、西欧的な神学論を基盤とする西欧的な常識が全くもって「常識」ではないことに衝撃を受けている。そして、彼の普遍的原理に対する批判はますます確固たるものとなった。

カーの述べるところによると、この小説の主題は、「奇妙な幻想的世界とわれわれの知っている世界との接触の物語である」（204）。また、この小説は、「ロシアの倫理的理想の最も完璧な文学的表現を具体化している」とカーは評価している（204）。

そして、カーはドストエフスキーがムイシュキンに具体化した、倫理的理想の本質を考察していく。カーはその倫理的理想の本質について、次のように述べる。

明らかに西欧的ではない、ロシア的な理想である（208）。

さらに、カーは具体的にロシアの倫理的理想の本質について以下のように記している。

ムイシュキンを通じて示された倫理的理想は、積極的というよりは、むしろ受動的な理想である。善良な人間とは善行を積むものであるという、西欧的な考え方とこれほどまでに、かけ離れたものはないだろう（208-209）。

『白痴』の中において、ムイシュキンが自ら進んで行った行為は見つけがたいとカーは述べている（209）。彼によると、ムイシュキンは常に受動的である。ムイシュキンによって表現されている、こうしたドストエフスキーの考える受動的な美德はロシア語の「スミレーニエ」という言葉で表されるものであるとカーは論じる（209）。

「スミレーニエ」とは、「苦悩を通じての救済という教義」であり「キリスト教的な最高の美德である」とカー説明している（209）。かくて、ムイシュキンの理想は受難にあらわれる。それは感情を行動より重視する。

カーは西欧における「理想」とロシアにおける「理想」の差異に関する詳細な考察を展開していく。カーは次のように述べている。

感情と行動が相反するとき、西欧の人々は、いつも行動を優先させてきた。西欧的なキリスト教においては、宗教を一定の行動を命じたり、禁止したりするものと、ますます看做すようになってきた。しかしながら、ドストエフスキーのほう福音書に見られる原始キリスト教の伝統を一段と正確に反映している（210）。

カーはヘブライの十戒とイエスの二大戒律を比較する。そして、カーは、イエスの二大戒律は行動ではなく、「神を愛することと隣人を愛することという、感情の状態を求めている」と論じる（210）。そして、地上におけるイエスの最高の業績を父なる神の意思に従って受けた「受難」であったとカーは主張する（210）。

よって、ムイシュキンの受難の倫理を描いたドストエフスキーは、「近代文学における原始キリスト教の理想について、唯一の読むに堪えうる表現を我々に提供しているのである」とカーは評価するに至っている（210）。

かくて、ロシア的倫理によると、感情を行動より重く見るということは、あきらかに罪の観念に影響を及ぼすのであり、「罪深い行動は罪深い精神状態よりは許しやすいもの」とカーは論じる（210）。

事実、ドストエフスキーも、虚無主義者や無神論者に激しい怒りを抱くにもかかわらず、泥棒、嘘つき、酔っ払いなどには、寛容であったことをカーは指摘している（211）。そして、カーはそのようなロシア的なドストエフスキーの思想と対極にある西欧文明に言及している（211）。

西欧の道德観は、裁判所や刑法の固有な概念によって毒されている。我々、西欧人たちは感情や主義主張に対しては寛容であるが、行動には不寛容である。戒律として、行動を重んじる西欧の我々は、まったく別な価値に基づいた世界に住んでいるといえる (211)。

このように、カーは、ロシア的な倫理的理想と、西欧的な倫理的理想が全く違うものであるということを認識した。換言すると、道德概念は、絶対的なものではないし、超越的な原理でもないことにカーが気づいたと、読み取ることができる。

以上、ドストエフスキーの『白痴』に対するカーの解釈や評価について論じた。

次に、ドストエフスキーの五大小説の一作であり、彼の最後の長編小説である『カラマーゾフの兄弟』に対するカーの解釈を検討する。

(3) カーによる『カラマーゾフの兄弟』の解釈

カー著『ドストエフスキー』第二十章は、「預言者ドストエフスキー：『カラマーゾフの兄弟』」と題されており、この大作について論じている。『カラマーゾフの兄弟』は40万語前後の叙事詩である。

この物語の筋立ては、以下のように要約できる。この作品は、三兄弟の父親の殺害をめぐり展開される。三兄弟の長兄であるドミートリー・カラマーゾフを、カーは「罪深い情熱の人」と記している。そして、次弟イヴァン・カラマーゾフを「知的懷疑主義者」とカーは表現している。そして、末弟のアリョーシャ・カラマーゾフについては、修道院で育てられ、「キリスト教的理想を日常生活へもたらすために俗界に帰ってきた者である」という紹介を、カーは行っている (285)。

既に、前項で明らかにしたように、カーの解釈によると、ロシア人ドストエフスキーにとっては、行動としての積極的な罪よりも、不信と冷酷さのほうがキリスト教的理想に反する。よって、「この物語の主人公は、アリョーシャであり、最も性質が悪い人物がイヴァンということになる」とカーは述べている (285)。

殺害された彼らの父親が発見されると、疑いはドミートリーにかかった。しかし、実際に殺人を犯した者は、彼ら三兄弟の父の庶子、スメルジャコフであった。彼は、イヴァンの不信に影響され、イヴァンの主義を実行に移したのであった。つまり、スメルジャコフはイヴァンの不信にそそのかされて、殺人を犯したことから、「イヴァンが殺人者である」とカーは記している (285)。その後、スメルジャコフは首を吊る。そして、無実のドミートリーが犯しもしない犯罪で、シベリアへ流刑される。そののち、自分の罪の重さを自覚したイヴァンは彼自身の本来の罪のために、狂気にかられる。以上が、カーの著作に従った、『カラマーゾフの兄弟』のあらすじである。

カーの解釈によると、この小説のテーマは二つある。第一のテーマは「悪の原理を代表するイヴァンとキリスト教的理想の典型アリョーシャとの論争」である。第二は、「罪と悩みを通してのドミートリーの救済」である（285-286）。

苦悩と至福に対する信仰は原始キリスト教に属するとカーは論じる（289）。そして、「現在の西欧キリスト教では、忘れられている、または不評となっている「悲しむ者は倖せなり」という至福は、ロシア思想では常に重要視されてきたことをカーは指摘する（290）。

カーはドストエフスキーの行った「苦悩と罪との密接な関係」に対する考察について、詳細に検討を加えている（292）。カーは以下のようにドストエフスキーの考えを分析した。

彼は、罪を苦悩の原因とみなす、西欧および東洋の神学者たちが犯してしまったよくある過ちに決して陥らなかった。彼は、苦悩とは罪を赦すために必要な心理的条件である、と固く信じていた。ドストエフスキーによって重要であると考えられた「赦し」とは、他人によるものではない。それは、罪を犯した者自身が自らを赦すことであった（292）。

すなわち、プロテスタント神学において、とても大きな役割を担ってきた個人的罪悪意識は、ドストエフスキーにとって「救済に辿りつく罪悪感」ではないことをカーは強調する。カーは、ドストエフスキーの意味する罪悪感を「罪の共産主義とでも言い表すのが、一番ふさわしいような理論」と形容している（295）。そして「だれも彼もが、すべての者に対して罪を犯したのだ」という、ある登場人物の言葉をカーは引用する。さらに、カーはゾシマ長老という登場人物の言葉を引用する。

すべての者があらゆることにおいて、全ての人に対して、罪を犯してきたのだ（295）。

カーはこの長老がアリョーシャに向かって続ける言葉をさらに引用している。

我々のだれもが、全ての者の、地上のあらゆるものの罪を荷っている。単に一般的な世界の罪ではなく、個々の一人一人が、この地上のあらゆるものに対する罪を荷っているのだ（295）。

このように、ロシア的な神学論と、西欧的な神学論の差異に、ここでもカーは衝撃を受けている。カーが如何に驚愕し、憧憬さえ覚えている様子が現れている部分を以下に引

用する。やや長い引用ではあるが、カーの思考に対する影響を考察するために必要であるため、引用の価値がある。

ある種の西欧人にとっては虚偽の口実とも考えられそうな、万人の罪に各個人が関与しているというこの考えは、確かに深くロシア国民性に浸透している。おそらくはロシア人に深く根差している共産主義的本能につながりを持っているのかもしれないと考えられる。最も顕著な、ロシア人の特性と従来看做されてきた、限らない寛容も、こうしたところから説明されうるのであろう。同胞を非難せずに、その罪に自分もまた関与していることを認めるのだ。西欧の範例に倣い、陪審制度がロシアにも 60 年代に設けられたとき、有罪の判決を得ることが極めて困難なことが発見された。なぜなら最も明白な犯罪の場合でさえも、陪審官たちは無罪にしたくてたまらぬ衝動に駆られるかのようだったのである (296)。

このように、ロシア的キリスト教の罪悪感にカーは、西欧との常識の差をはっきり認識し、西欧的道德観や価値観といかに違うかを、驚きと共に受容していることを明らかにしてきた。そして、道德観や価値観は、普遍的かつ超越的な何かではないと、カーが考えるに至った様を追ってきた。

ここまで、ドストエフスキーの五大小説の内、『罪と罰』、『白痴』と『カラマーゾフの兄弟』がカーに与えた影響を考察した。これらの作品は、ロシア的な道德に対する思想を代表しているとカーは捉えている。そして、これらの作品は、カーに道德に対する新しい視座を与えたばかりでなく、カーに時間と場所を超越する普遍的な、超越的原理に基づく知識形態に対する批判的態度を形成させた。異文化に根差した異なる思想を知ったカーは、西欧的な原理とは、いかに彼が信じていたよりも脆いものかを実感し、衝撃を受けたことが明らかである。

以上、ドストエフスキーの五大小説がカーに与えた影響を考えながら、ドストエフスキーの五大小説からカーが得たものは何かを考えてきた。既述のとおり、ドストエフスキーのシベリア・オムクスの投獄経験とドストエフスキーの五大小説は、カーに現実が変わればすべてが変わるのだという、普遍的な原理、超越的原理に基づく知識形態に対する批判的態度を形成させた。そしてその実感は国際政治学の古典である『危機の二十年』と共通している。

結語

本稿は、1930 年代におけるカーの著作『ドストエフスキー』と『危機の二十年』には以下の共通点が存在することを明らかにした。それは、時代や地域の違いを超越した原

理に基づく知識の形態への批判である。この視座は、『危機の二十年』においては、抽象的な原理に対する批判と、道義の解釈における普遍的善悪の問題の中に発見できることを、第二節において明らかにした。また、本稿は、第三節にて、超越的な原理に基づく知識形態への批判は、『ドストエフスキー』においても発見できることを、ドストエフスキーのシベリア流刑経験と彼の著した五大小説のうち『罪と罰』、『白痴』、『カラマゾフの兄弟』のテキスト分析を行うことで明確にした。

今後の課題の一端としては次の事柄が挙げられる。

本稿で明らかにした超越的な原理に基づく知識形態に対する批判は、カーによる他の1930年代の著作にも表れているのであろうか。今後、『ロマン的亡命者たち』や『バクーニン』といったロマン主義者たちに対するカーの研究や『カール・マルクス』におけるマルクスに対する彼の記述にこの視座が含まれるのか否かを研究することは、普遍的な理論を構築しえなかったことを批判されてきた『危機の二十年』を、既存の研究とは別の視点から検討するうえでの貢献となりうるのではないかと考える。

参考文献

一次文献

- Carr, E.H. (1931) *Dostoevsky (1821-1881): A New Biography*, London, Allen & Unwin (松村達雄訳『ドストエフスキー』筑摩書房、1968年)。
- (1939) *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, London, Macmillan (原彬久訳『危機の二十年』岩波文庫、2011年)。
- (2000) “An Autobiography, ” in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, London, Palgrave, pp. xiii-xxii (中嶋毅訳「自伝的覚書」『思想』944、200年)。

二次文献

- Cox, M. ed. (2000) *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, 2000.
- Cox, M. (2010) “E. H. Carr and the Crisis of Twentieth- Century Liberalism: Reflections and Lessons,” *Millennium: Journal of International Studies* 38 (May) pp.523-533.
- Fiott, D.(2010) “Carr’s Quest: Escaping the ‘Rules’ of International Relations?” *ECPR Graduate Conference*, Dublin, Summer 2010.

- Howe, P. (1994) "The Utopian Realism of E. H. Carr," *Review of International Studies* 20 (July), pp.277-297.
- Johnston, W. (1967) "E. H. Carr's Theory of International Relations: A critique," *Journal of Politics* 29 (November), pp.861-884.
- Jones, C. (1998) *E. H. Carr and International Relations: A Duty to Lie*, Cambridge University Press.
- Lauer, M. (2005) "From a Bookshop in Riga: Edward Hallett Carr's Debt to Fyodor Dostoevsky," A thesis submitted to the Faculty of graduate Studies and Research in partial fulfilment of the requirements for the degree of Master of Arts, Institute of political Economy, Carleton University, Ottawa, Ontario.
- Mearsheimer, J. (2005) "E. H. Carr vs. Idealism: The Battle Rages On," *International Relations* 19 (June), pp.139-152.
- Molloy, S. (2003) "Dialectics and Transformation: Exploring the international Theory of E. H. Carr," *International Journal of Politics, Culture and Society* 17 (Winter), pp.279-306.
- Molloy, S. (2006) *The Hidden History of Realism: A Genealogy of politics*, Palgrave.
- Nishimura, K. (2011) "E. H. Carr, Dostoevsky, and the Problem of Irrationality in Modern Europe," *International Relations* 25 (March), pp.45-64
- Wilson, P. (2000) "Carr and his Early Critics: Responses to The Twenty Years' Crisis" in Cox ed. *E. H. Carr: A Critical, Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, pp.165-197.
- Wilson, P. (2001) "Radicalism for a Conservative Purpose: The Peculiar Realism of E. H. Carr," *Millennium: Journal of International Studies* 30 (January), pp.123-136.
- 河村しのぶ (2021a) 「西村邦行著『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』に関する一考察」『総合文化学論輯』第14号:1-21.
- 河村しのぶ (2021b) 「E・H・カーのリアリズムの起源と『ドストエフスキー』の影響」『総合文化学論輯』第15号:1-23.
- ハスラム、J. (2007) 『誠実という悪徳—E. H. カー 1892-1982—』、角田史幸、川口良、中島理暁訳、現代新潮社.
- 西村邦行 (2010a) 「E. H. カーにおけるヨーロッパ的なものの擁護 1」『法学論叢』第166号5巻:84-99.
- 西村邦行 (2010b) 「E. H. カーにおけるヨーロッパ的なものの擁護 2」『法学論叢』第167号3巻:18-139.

- 西村邦行 (2010c) 「知識人としての E. H. カー：初期伝記群と『危機の二十年』の連続性」『国際政治』第 160 号:34-47.
- 西村邦行 (2012) 『国際政治の誕生－E. H. カーと近代の隘路－』昭和堂.
- 山中仁美 (2003) 『E・H・カー研究』の現状の状況をめぐって」『国際関係学研究』第 29 号:139-147.
- 山中仁美 (2014) 「西村邦行著『国際政治学の誕生：E・H・カーと近代の隘路』」『国際法外交雑誌』第 113 号 3 巻：475-479.
- 山中仁美 (2017) 『戦争と戦争のはざままで』、ナカニシヤ出版。

[E. H. Carr's Critical Perspective on Knowledge Forms Based on Transcendental Principles:
As a common denominator seen in *Dostoevsky* and *The Twenty Years' Crisis*.]

[KAWAMURA, Shinobu・元九州大学大学院法学府博士後期課程・日本翻訳連盟認定翻訳士・産業翻訳事務所代表・現在の研究テーマ：E・H・カーの国際政治思想]